錆びた浮標（ブイ）

北方謙三

錆(さ)びた浮(ブイ)標
北方謙三(きたかたけんぞう)
© Kenzo Kitakata 1995

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

1995年7月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 出版部 (03) 5395-3510
販売部 (03) 5395-3626
製作部 (03) 5395-3615
Printed in Japan

デザイン——菊地信義
製版——信毎書籍印刷株式会社
印刷——信毎書籍印刷株式会社
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-263009-5

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

講談社文庫

錆びた浮標（ブイ）

北方謙三

講談社

目次

跳ぶ夜　5
喪服　45
微熱　85
残像　125
靴　165
テイル　205
風呂　245
錆　285
解説　池上冬樹　325

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

本作品は一九九二年七月に小社より単行本刊行されました。

跳ぶ夜

1

階段が狭すぎるとは、いつも思っていたことだった。カーペットを張ってあるので、神経に響くような靴音はしないが、昇降するたびに微妙な圧迫感があった。私の中でそれはいつまでも消えることはなかったが、私の店の客たちは、大して気にしているようでもなかった。

いつか馴(な)れるだろうと思っていた。いままで、大抵のことには馴れてきたのだ。閉所恐怖症というわけでもないのに、私はこの階段の狭さに八年間馴れず、昇降はいつも小走りという具合だった。

古いビルの二階で、階段を拡(ひろ)げるというのは無理な話だった。消防署から指導を受けて、手洗所の奥にドアをひとつ付け、そこからビル全体の階段に出られるようにした。それでも、手洗所から店に出入りしようとは思わない。文字通り、非常口なのだ。

「いつまで待たせる気なのかしら、ほんとに」

咲子(さきこ)が言った。客は舗道にうずくまったまま、じっとしている。まだ若い、学生のような

男だ。

「拡げるわけにはいかないんだからな」

呟いた私に、咲子が訝しそうな視線をむけてくる。ようやく、救急車のサイレンの音が近づいてきた。

「救急車って、誰かが付き添っていかなくちゃなんないんじゃないかしら」

「しかし、この人が誰だか、おまえも知らないだろう」

「大丈夫ですよ、俺。意識がないってわけじゃないんだし、どこの誰かは、自分で言えます」

金はなさそうだった。店の勘定を払うので精一杯だっただろう。無意識のうちに財布の中身を見分ける習慣が、いつの間にかついていた。大して外れたことはない。

救急車のサイレンが大きくなり、やんだ。救急隊員が担架を持ってくる。

付き添っていけと咲子に言いかけ、思い直して私は自分で乗りこんだ。救急隊員は、当然という表情をしている。

サイレンを聞きつけた、野次馬が集まりはじめていた。私鉄沿線の、数年前からは雑誌などでも話題になる流行の街だったが、それはごく一部の地区で、私の店はそれほど繁華な場所にあるわけではなかった。

病院には、すぐに着いた。私が廊下で待っていたのは三十分ぐらいのもので、足首のあた

りをギプスで固定された青年が運び出されてきた。その間に救急車はまた一度やってきて、きつく眼を閉じてなにか呟き続ける老婆を運びこんだ。駅周辺は若い連中がすっかり多くなったが、もともと住宅地なのだ。

「御迷惑をかけてしまって」

松葉杖で躰を支えた青年が、首だけ曲げるような恰好で、頭を下げた。剝離骨折だったという。二万三千円の治療費は、私が立替えてやった。白衣の上にカーディガンを羽織った窓口の看護婦は、私の顔をじっと見つめてなにか言いそうになったが、その前に私は踵を返していた。電車などで、時々私を見つめている人間がいることに気づく。ただ見つめているだけで、それ以上なにか起きることは滅多になかった。見たことがあると思う人間は、いくらかはいるようだ。ただ自分が考えている人間かどうかは、確信が持てないのだろう。

「タクシーで帰った方がいいな。近くなのか？」

「二千円ぐらいで、行けます。でも」

「貸しておこう」

私は青年に、千円札を二枚握らせた。しめて二万五千円の貸しになる。年に一度か二度、私は気紛れを起こして、親切な中年男の役回りをやる。今夜は、どうもその日のようだ。

「俺、大西っていいます。あの店のマスターですよね？」

「マスターと呼ばれるほど、店にいることはないがね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「これ、お預けしときます。ほかに、なにも持ってないし」
大西が差し出したのは、学生証だった。私は黙って受け取り、病院の玄関を出るとタクシーをつかまえて戻ってきた。青年が乗りこむのを見届けてから、私もタクシーを停めた。店まで、充分にワンメーターで行く距離だ。
「すっごい音がしたんだから。前に、滑り墜ちた人はいるんだけど、舗道でのびてたの、はじめてだわ」
咲子が喋(しゃべ)っている客に挨拶(あいさつ)し、私はカウンターの中に入った。ボックス席が二つと、カウンターのスツールが四つ。十人も入ると、息苦しい感じがする小さな店だ。階段から墜落した大西は、恰好の話題を提供したらしい。
「足首のところの、剝離骨折だそうだ。松葉杖で帰っていったよ」
ボックス席から眼をむけてきた咲子に、私は言った。期待にそえたのかどうかは、わからない。咲子はなにも言おうとしなかった。
三人組の客が、ボックス席から腰をあげた。私は背中に挨拶を送った。村野(むらの)の声がそれに重なる。目立たず、ほとんど表情を変えることもないが、不思議にいやな感じはしない。バーテンとしてはましな方だろう、と私は思っていた。勤めはじめて、二年半というところだ。
咲子は十一時半で、村野は看板までということになっていた。会計は一応十二時で締め、

あとは村野に任せる。村野が誤魔化す金は、わずかなものだ。
客が二人残っていたが、私は十二時十五分に店をでた。私のマンションまで、店から歩いて七、八分ほどのものだ。
三十年も前から、私はこの街に住んでいた。その前は函館で、親父の仕事の都合で東京に移り住んだのだ。親父は私が二十二歳の時に死に、おふくろは八年前に亡くなった。土地を処分してマンションと店を買ったが、それでも多少の銀行預金は残った。それは八年間、増えることも減ることもなかった。
私には俳優としての収入がいくらかあり、十年前からはじめた劇評や映画評の原稿料の収入もあった。それで酒場の一軒も持っていれば、食うには困らないだろうと思えた。八年前、私はようやく三十代の半ばに達したころで、いくらか自虐的な気分に駆られながら、安逸な生活を選択したのだった。
部屋へ帰ると、私はバスの湯を出し、部屋の暖房を入れた。秋のはじめだが、夜中はかなり冷えこんだ感じがする。
風呂を出ると、バスローブ姿で一、二杯ブランデーをひっかけ、原稿用紙にむかう。大木良二とペンネームを書きこむことにはすっかり馴れて、なんの違和感もない。
大木良二が私だと知っているのは、出版社の担当者ぐらいのものだった。私が書いているのは月刊の総合誌で、多少の悪意が滲んだ文章が、読者の微妙な悪意と重なり合うらしく、

十年間そこそこの人気で続いていた。単行本としてまとめたものが、すでに三冊に達している。

俳優としての私は、絵に描いたような売れない脇役だった。もうちょっとアクの強さが出れば、存在感も多少強くなり、個性的な脇役になれる。これは、大木良二が私について書いたことである。十年間の連載の中で、私についての記述は二度しか出てこない。

午前四時前後まで、私は原稿を書いたり、本を読んだり、ビデオを観たりしている。それから眠り、起き出すのは十一時といったところだ。十二時までに掃除と洗濯を済ませ、昼食を作り、一時ごろから外出する。早朝から仕事が入った時は、当然睡眠不足となるが、そういう日は月に一度ぐらいしかなかった。起きるのがいやだから、と私は正直な理由で断っているが、それがまともに取られないだろうということも、計算していた。仕事の内容に不満があるのだろう、と解釈されることが多い。正直さで逆手に取ってやればいい世界だと、いつの間にか自分のやり方を決めてしまったようだ。

電話が鳴った。

「眠れないの」

順子だった。三十を二つ三つ越えた女優で、人気は私などとは較べものにならない。化粧品のコマーシャルにも出ているから、テレビをかければ大抵どこかのチャンネルで現われる。

「俺は、眠れるぜ」
「いいじゃない、眠る前に少し相手をしてくれたって。どうせ寝るのは四時過ぎじゃない。それより、あたしを殺す役、あんたを指名したわよ。最後の大事なところだから、絶対あんたでなくちゃいけないって」
「プロデューサーが、直接俺に会いに来た。こちらも、丁寧にお断りした」
「いやな男ね」
「どうせ断るとは、わかってただろう、君は」
「主演が気に食わない、なんて言って断ったんでしょう」
「いや、本をよく読んで、ちょっと悲しすぎる役柄だ、と言った。本をいじってもいいようなことは言ってたが」
「そんな気はないわよ。あたしが絶対って指名した時、いやな顔してたし。それより、あたしのことなにか言ってた？」
「いや」
私の仕事など、順子にとってはどうでもいいことで、自分についてどんなことが語られたか訊きたいのだ。
「抱かせそうな素ぶりをして、直前でするりと逃げてやったの」
「得意のやつだな」

「女優を抱きたがるプロデューサーなんて、五年でも十年でもお預けを食らわしておけばいいのよ。そのうち消えるわ」

順子は、抱いて面白い女ではなかった。二ヵ月に一度ほど抱くという関係が、この一年半ほど続いている。男に奉仕させることに馴れた女だということは、最初の時からわかった。女優のタイプのひとつだ。

「ねえ、あたし安全日よ」

声に、媚(こ)びが混りこんできた。

「指があるだろう」

「すごいことを言うのね。誰にむかって言ってると思ってんのよ」

「一本で足りなきゃ、二本使え」

「後悔するわよ」

「後悔はしない。ずっと前から、諦(あきら)めちまってるからな」

「なにを？」

「人生ってやつをさ」

「気障(きざ)な男ね。そういう男にかぎって、誠実な役しかやらないなんて言うのよね」

「早く寝ろよ」

「ねえ、欲しいよお」

「色狂いは、ほかの男を相手に頼む。もっと淑やかな女でいる時、電話してこい」
「憶えてなさいよ」
電話が切れた。
怒っているのではない。私のもの言いを愉しんでいるのだ。被虐的な傾向があるわけではなく、むしろ支配欲が強い方だろう、と私は思っていた。私のもの言いが、逆にそれを刺激しているらしい。激しく一途な女、という役柄が多かった。最近では、聡明な女弁護士などという役もあり、大人の女優への脱皮も試みているようだ。
私は、書きかけの原稿用紙にむかった。
このところ、脚光を浴びてきた若い俳優の主演作について書いているところだった。
この男も、俺を追い越していった。ふと、そう思った。追い越していった人間はいくらでもいて、追い越した先で惨めに潰れている姿に出会うこともあった。追い越されることには馴れきって、当たり前のことになってしまっている。ただ、時折、また追い越されたという思いが滲む瞬間がある。
二十代の後半の、ほんのわずかな時期、私は一線に近いところを走った。新劇から転向した、演技力のある俳優という評価を受けたのだ。その間、私は追い越されることに、異常に過敏だった。追い越した者や、追い越そうとしている者を、呪ったと言ってもいい。
ある時、追い越した者の数を数え、その多さに衝撃を受けた。そのあたりで、私の持って

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com